



## 第二話 フクスケ

私たちのフクスケについては、そのいたずらぶりを少し、前回「ロリン」の中で書きました。

私たちについてはなじみが少ない人が多いでしょう。夜行動物だからです。昼間は昼寝をしているのですが、私たち夜行動物にとっては昼寝は大切です。なぜなら夜は徹夜して働かないと食べ物にありつけないので、昼寝を怠って寝不足だと、ねずみなどの獲物に逃げ切られてしまいます。

フクスケと初めて会ったのは例の森の中の秘密の湖の近くです。ぼくは一人乗りのボートをリヤカーで森の中を通過して湖に運んでいました。汗が体じゅうからふき出して、めがねが鼻の上をずり落ち、何度も手を休めてめがねをずり上げました。そんなときです、フクスケがいきなり飛び出してきて車輪にひかれたのです。みると尻尾にタイヤのあとがついています。そのときのフクスケのなき声ときたらあまりに大きかったので、思わず笑ってしまいました。え、私たちってどんな声で痛がるかって？それはイタッチ、イタッチ、にきまってるじゃないですか！

「ハッハ、ごめんごめん、君が急に飛び出してきたから、おじさんよけれなかったよ」

「イッチッチ。やいもっと気をつけてくれよな。尻尾だったからよかったけど、足だったらあすの運動会に出れなくなるところだったんだぞ！」

「ごめん、ごめん。で運動会ってなんだい？」

「あした東京都の選抜選手が、山手線のレールの上を走って、一周するんだ。ぼくは目白と池袋の間を走る。つまりアンカーだぞ！」

「おいおい、山手線なんてあぶないぞ」

「なに、終電が走り終わった深夜にスタートさ」

「そうか、きみらイタ公は夜行性だったもんな。優勝したらどうなるんだい？」

「そりゃあ、スカイツリーのとっぺんを一年間自分たちの家にする許可がもらえるんだ。」

「おいおい、あんな高いところに巣を作ってあぶねえぞ」

「いえてる。だから実際には住まないさ。寒いらしいしね。それに今度の地震なんかのときにとっぺんにいたら振り落とされてしまうだろうしね。」

「何よりも、あそこまで登るのがたいへんだろうよ」

「おじさん、俺たちは軽いから、それは平気さーね。・・・まあ象徴的な意味があるんだ。つまりスカイツリーが優勝トロフィーってわけさ」

「ふーん。そりゃあずいぶん立派だな。じゃあスカイツリーがないころは何が優勝トロフィーだったんだい」

「そりゃあ、イタチの宮（みや）杯にしまっているじゃないか！」

ぼくは、すっかり話に引き込まれて、ちょうどいい一休みができたが、そろそろ出発しようかとリヤカーを押し始めると、このいたちはリヤカーに乗せたボートの中に飛び乗ってきた。

「湖に行くんだろ、乗せてもらうぜ。」

「山の手線を一周するといったが、どのくらい時間がかかるね？」

「記録は山の手線内選抜のチームが三年前に出した45分19秒3だ。なんせ、あいつらいつも山手線で練習できるわけで、どこでスピードを上げてどこでブレーキをかければレールから落ちないで走れるか、からだ覚えてるからな。地元の利というやつさ」

「45分なら電車よりも早く一周するわけだ」

「なんせ電車と違ってノンストップだからね。」

「駅伝のようなもんだね」

「ようなもん、じゃなくて、文字通りそうじゃねえか。・・・それでこのボートはどうすんだい」

「森の湖にうかべるさ。これに乗って釣りをしたり、昼寝をしたりさ」

「あの湖には、ワニがいるから気をつけな」

「おいおい、うそだろ？日本にはワニなんかいないさ」

「ペットで飼われていたやつが、森に捨てられて、あそこの湖に入っちゃったんだ。」

「ペットならおとなしいワニかい？」

「ワニはワニさ。気をつけな。今じゃ湖の主だ。前の主のぼらは食われちゃった」

「へえー」 ぼくは悲鳴のような声を上げた。

「おっとそこが俺の家だ。名前はフクスケという。まあお見知りおきを」

フクスケというイタチは飛び降りると、タイヤのあとの残った尻尾を振りながら大きな木の下の太い根っこを門にした穴に入っていった。

ぼくはワニの話聞いたので、物騒な気持ちになり、湖に行くのを躊躇していると、さっきの穴から「ハッハッハ。ひっかかった、ひっかかった。ワニはうそさ。だけどぼらの親父には挨拶をして、ボートを入れる許可をとっておくことだな。そしてつりは針を使ってはいけないってことよ」

「わかった。ぼくの名前はひろしだ。お見知りおきを」

ぼくは湖に着くと、「ぼらのおやじさん、ボートを入れます。許可をください。また針を使ってのつりはしませんので、つりの許可もください」と大声で言いました。

すると大きなぼらが水面から顔を出して、「おれはここの主じゃないから許可など出せん。許可をもらうなら湖の主のワニ親分にもらいな、ふっふっふ」

ぼくはもう引っかからないぞと思い、ボートをリヤカーから下ろして、さっさと水に浮かべました。そしてその中で横になって休みました。

おわり

photos:

[amazon.com/author/nagamitz-kazuhiro](https://amazon.com/author/nagamitz-kazuhiro)